

アフターマッチ ファンクションと直会 (After match Function)

「アフターマッチファンクション」という言葉があります。他のスポーツにはない、ラグビーのカルチャーのひとつで、ノーサイド(試合終了)後に必ず行われる飲み会のことです。以前はただ「レセプション」と言っていて、近年「アフターマッチファンクション」とすこし気取って呼ぶようになったようですが、試合が終わったら敵味方関係なく両チームの関係者とレフェリーなども含め全員で同じ酒を飲んで、お互いを讃え合う交流会のことで、試合をした相手などに感謝を伝える儀式ともいえます。互いに勝利を目指してのぎを削った者同士、肩を組んで盃を交わし、エールの交換や、チーム歌の披露なども行われ、相手へのリスペクト(尊重、尊敬を表す)です。

ところで、ワールドラグビーの定めるラグビー憲章には「品位・情熱・結束・規律・尊重」という五つの価値(コアバリュー)が謳われています。その中で「チームメイト、相手、レフェリー、および、ラグビーに関わる人々を尊重することは、最も優先すべきことである」としていますが、このことはラグビーの成り立ちにも関係がありそうです。十九世紀初頭に英国で生まれたラグビーは教育手段(アスレティシズム)としてスタートしました。競技の勝ち負けよりも試合を通して紳士(ジェントルマン)を育



成することに主眼を置き発展してきた歴史があります。だからラグビーの試合では、フアールをうけてわざと転んだり、選手がレフェリーにクレームを言っているシーンはまず見られません。加えて、ラグビーはある種、格闘的な無差別級のぶつかり合いでもありません。お互い体を激しくぶつけ合う競技だからこそ、常に相手や周囲を尊重することを心がけるのです。「アフターマッチファンクション」もまた、相手への尊敬無しには成り立たないし、それこそ相手への尊敬を醸成するための仕掛けでもあるのでしよう。敗れてどんなに悔しくても酒を酌み交わし笑顔で握手することで、お互いを尊重し、相手への尊敬が育まれていくのです。

これに似たものが神社にもみられます。神社のご祭典の中で「直会」という儀式がそれです。お祭りにおいて、ご神前にささげた供え物(神酒や神饌)をお下げした後におこなう神人共食の儀礼。「直会」とは「なおりあい」のことで、神祭りのために、清まった状態になったのを、お祭りを終えて平常に直る、復することを意味します。お祭りに奉仕した神職や参役者をはじめ参列者が、祭典後に一堂に集い行う儀式で、しばしば酒肴を交えた宴会的な側面もみられます。厳粛な儀式の後のウタゲとあつ

て、歌舞をとまなうこともあり、ご祭典を通じてご神徳を戴き、それを日常生活に発揮顕現するための復常行事であり、お祭りと実生活を結ぶ重要な一線をなす儀式なのです。実際、お祭りに関わった人々が楽しく飲み食いし、共に語り合い、親しくなっていく場でもあり、神社のお祭りに関わるといったご神縁によって地縁も深化し、地域のコミュニティが醸成されていきます。

最後に、人類学の視点から。「アフターマッチファンクション」にせよ「直会」にせよ、人々が共に飲食をする行為は、人類固有のコミュニケーションであったと考えられています。たとえばサルにとって食事は栄養補給に過ぎず、人間のように長時間談笑しながら食事を共にすることはあり得ません。食べ物は、本来ほかの個体と競合するはずのものだから、ほかのサルに食べ物をとられる前に自分だけで食べるのがサルの食事なのです。共食は「私たちは食べ物を巡って争わない関係である」という関係性が前提にあつてはじめて成り立ちます。そして共に食事をすることで、第三者へは特別な関係であるという、アピールの意味も含まれているそうです。人が言葉を発明する以前から、共に飲食する行為は争いのない関係を確立し、共同意識を高める重要な行為であったのです。しかしながら、昨今一人で飲食する個性(孤食)が増えているといわれて久しく、コロナ禍もこれに拍車をかけたでしょう。人類が獲得した共食は、共食力を生み、社会を育む源泉で、ラグビーにおける「アフターマッチファンクション」や神社の「直会」は、まさに人の営みに欠かせない共食の場として、ますますその大切さを気づかせてくれるのではないのでしょうか。

事務局 京條寛樹

第5回下鴨神社杯 タグラグビー大会 第一蹴の地でラグビーを 実施報告



第5回下鴨神社杯タグラグビー大会「第一蹴の地」でラグビーを!

日時… 令和3年10月24日(日)9時~12時半
場所… 賀茂御祖神社(下鴨神社)・糺の森馬場「第一蹴の地」付近帯
主催… 世界遺産下鴨神社ラグビー第一蹴の地顕彰会
共催… 賀茂御祖神社(下鴨神社) / (財)世界遺産下鴨神社崇敬会、京都紫竹ロータリークラブ
協力… 関西ラグビーフットボール協会、京都府ラグビーフットボール協会
後援… 京都新聞 / KBS京都
参加者… 選手118名(ラレーヤー下鴨小学校、下鴨中学校、洛北高校、下鴨神社スカウト、その他)

新型コロナウイルス感染症禍にもかかわらず、関係各位のご努力により、今年も下鴨神社杯タグラグビー大会を開催することができました。市教育委員会の基準に従い、感染症対策を講じた上で競技時間も短縮。下鴨地域周辺の小中高生のみに参加者を限定することになったものの、近隣の小中高生と一緒に活動することで、中高生が小学生たちの指導をしたり、子供たちが大人の運営の助勢などを行うなど、異年齢の交流活動が随所に見ら

れ、子供たちの社会性を育む有意義な大会となりました。開会式前の会場準備も、子供たちを交えて行い、開会式ではラグビーの神さまである雑太社に全員で参拝し、神社の神職からお祝いをうけました。世界遺産である神社の社殿や糺の森の清掃活動を全員で行ったあと、試合では会場に設けられた二面のコート内を木漏れ日を受けながら、子供たちは思う存分に走りまわり、ラグビーを楽しむことができました。コロナ禍の中においても「ラグビーを通じて日本の伝統文化に触れる機会を提供し、神社、鎮守の森における青少年活動を推進する」という目的にかなった大会を継続して開催できたことは、関係者の思いが結実したものと思っています。将来、大会に参加した子供たちが、フェアプレー、ノーサイド、ワンフォーオール、ワンとといったラグビーの精神を培い、世界遺産の神社で実施できたことにより、日本が世界に誇る文化や文化財の保存と継承の担い手となることを期待するものもあります。全ては111年前の先人の一蹴りからはじまりました。この先の100年も見据えて、この取組を続けていくことに価値があると確信しています。本大会にご協賛戴きました京都紫竹ロータリークラブ様をはじめ、ご協力戴いた全ての方々に感謝申し上げます。



集合写真

